



淡河 崇亨

NECネットエスアイ株式会社
システムエンジニアリング
サービス事業本部
宇宙・防衛システム事業部
第二システム部 課長

中村 隆介

NECネットエスアイ株式会社
営業統括本部 北海道支店
第二ソリューション営業部 課長

菅 浩也 さま

大樹町 宇宙航空課 課長

干場 康行 さま

SPACE COTAN株式会社
常務取締役 兼 執行役員 CTO

ステークホルダーの声を起点とした価値創出

大樹町 × SPACE COTAN × NECネットエスアイ 対談

官民連携で宇宙産業の未来を共創する

北海道の南東部に位置する大樹町。約40年前、「町民が夢を持てる事業をつくりたい」という想いから始まった挑戦は、民間に開かれた商業宇宙港「北海道スペースポート (HOSPO)」の整備へとつながり、いま、宇宙産業を核とした新たなまちづくりが進んでいます。大樹町、HOSPOを運営するSPACE COTAN、そして通信基盤の構築とまちづくりに携わるNECネットエスアイ。それぞれの立場から共創の歩みと宇宙産業を地域の未来へつなげる取り組みについて語り合いました。

※ 本文中では、登壇者および企業・団体名の敬称を省略して表記

「夢物語」から始まった 40年にわたる大樹町の挑戦

菅 約40年前、過疎化や第一次産業の衰退が進むなか、「町民が夢を持てる事業をつくりたい」と考えた町長が、航空宇宙産業基地の誘致を始めました。当初は「夢物語」と受け止められましたが、関係省庁へ足を運び、少しずつ理解を広げてきました。



その後、民間による打ち上げ需要の高まりなどを受け、町独自の公共事業としてロケット打ち上げの射場を整備・運営する道を選びました。東と南が海に開け、周辺に人口密集地がないという地勢も、大樹町の大きな強みです。

世界に開かれた宇宙港から、 新たな産業を育てる

干場 大樹町が長年育んできた構想を、持続可能な事業として形にすることが、私たちSPACE COTANの役割です。大樹町とともに資金調達や技術的な検討を進め、国内外の多様な事業者が利用できる、民間に開かれた商業宇宙港「北海道スペースポート (HOSPO)」の整備と周辺地域の持続的な発展に取り組んでいます。

HOSPOの特徴は、特定のロケットだけを対象とするのではなく、垂直に打上げるロケットや、水平方向に離着陸するスペースプレーンなど、多様な機体を受け入れられることです。宇宙港を核に企業や人材が集まり、新しい事業が生まれる「宇宙版シリコンバレー」をつくりたいと考えています。

中村 当社は、SPACE COTANや大樹町との対話を重ねながら、宇宙港の整備と、その先のまちづくりにどのよう

異なる技術をつなぎ、構想を形にする

中村 当社は大きく三つの領域で参画しています。一つ目は宇宙戦略基金における研究開発です。建設が予定されている射場Launch Complex 2 (LC2) で高頻度な打ち上げを可能にするため、マルチベンダーに対応する無線通信システムを開発しています。二つ目は建設中の射場Launch Complex 1 (LC1) 内部のネットワーク構築です。三つ目は大樹町へのまちづくりの提案です。宇宙産業と町がともに発展することを目指し、ワークショップを通じて大樹町が今後重点的に伸ばすべき機能を検討しています。

淡河 干場さまのお話にあったように、HOSPOではロ



ケットごとに異なる仕様や運用方法に対応できる地上設備が求められます。開発で重視したのは、個別の要望に応えつつ、将来の利用拡大を見据えて共通化できる部分を見極めることです。国内外のベンダーへのヒアリングを重ね、必要な

機能を整理し、その成果を打ち上げや追跡管制に使用する「可搬局」の開発に活かしています。安全性に加え柔軟性と拡張性を備えた仕組みを構築していきます。

中村 当社には、JAXAの運用支援や種子島でのロケット打ち上げを長年支えてきたノウハウと実績があります。また、自社製品に限らず、国内外のメーカーの機器を組み合わせ、最適なシステムを構築するシステムインテグレーション力も強みです。

宇宙分野で培ってきた知見と、異なる技術を組み合わせる力を活かし、HOSPOに求められる通信基盤を整備していきます。

地域に根差した宇宙産業の未来像

干場 ロケット打ち上げは、騒音や立入規制などで漁業や酪農をはじめ地域の多くの方々に影響します。そのた

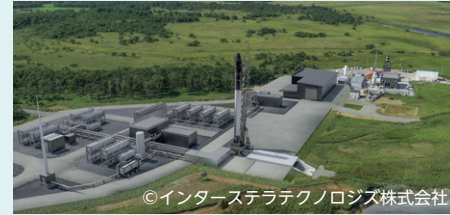
め、地域の皆さまのご理解と丁寧な調整が必須であり、技術だけでロケットを打ち上げることはできません。多くの手順書を作成するとともに、関係者との調整を進め、時間をかけて準備していきます。

菅 おっしゃる通り、ロケット開発に劣らず難しい調整ですが、町とSPACE COTANが先頭に立って地域の皆さまと丁寧に対話し、信頼の醸成に努めています。宇宙産業を長く続くものにしていくためには、地域と事業者が理解を深め、力を合わせる事が欠かせません。

中村 私たちも、その土地を深く知らなければ、本当に必要な提案はできないと考えています。そこで、十勝で合宿を行い、地域の歴史や農業について学びました。宇宙産業をきっかけに移住したSPACE COTANの社員や当社のエンジニアが交流し、地域の暮らしや産業とのつながりを踏まえて、まちづくりを見つめる機会にもなりました。地域の皆さまとともに宇宙産業と地域社会が共生できる持続可能な施策を考えることも、私たちの役割です。

宇宙港から、持続的な産業へ

菅 LC1の公共整備は2026年9月末に一区切りを迎え、IST社のZERO初号機打ち上げに向けた準備段階へ移行します。今後は、LC1での高頻度な打ち上げの実現に加え、本格的な商業打ち上げに対応する新たな射場LC2整備の検討を進めていきます。



大樹町が進める「宇宙のまちづくり」

北海道大樹町では、約40年前から官民一体で「宇宙のまちづくり」を推進しています。民間に開かれた商業宇宙港「北海道スペースポート (HOSPO)」を核に、JAXAや民間企業、大学等によるロケットの打ち上げや各種実験の拠点として発展を続けています。

干場 最大の課題はロケットを打ち上げるだけで終わらず持続的な産業に育てていくことです。そのためには、国内に魅力的な射場と安定したサプライチェーンをつくる必要があります。同時に、複雑な技術をより使いやすく標準化し、新たな企業が宇宙産業に参入しやすい環境を整えていくことも重要です。

中村 このプロジェクトを起点に陸・海・空・宇宙のすべてを確かな通信技術でつなぎ、「通信のことなら当社に聞けば安心」と言っていただけの存在でありたいと考えています。

淡河 現在、共通無線システムは実機開発段階を迎えています。SPACE COTANの要望を技術に落とし込み、機体ごとの仕様に柔軟に対応できる装置の実現を目指しています。安全で持続的な打ち上げを技術面から支え、その成果を大樹町が描くまちづくりにもつなげていきます。現場に寄り添い、技術面から長く伴走するパートナーでありたいと思っています。

菅 10年後には、ロケットの打ち上げが日常の光景となり、子どもたちが宇宙を地域に根差した身近な仕事として捉え、自然に宇宙を目指す。そんな環境を大樹町につくりたいですね。

